

天王寺物狂

ワキ 源太仲光

子方 俊徳丸

狂言 天王寺門前の人

シテ 狂女

地は 摂津

季は 雑

「げに世の中はうたかたの。く。あはれなりける
憂き身かな。

「かやうに候ふ者は。河内の国高安の住人。左衛門
の尉信俊殿の御内に。源太仲光と申す者にて候。
さても我君宝貨身に余り。不足なき御事に候へど
も。一人の御子なき事を悲しみ給ひ。清水の觀世
音へ祈誓し給ひ。男子一人儲け給ひて候。御名を
ば俊徳丸殿と申し。父母の御寵愛浅からず候ふ

に。去んぬる頃母上空しくなり給ひて候。御愁傷
の余りにや。御悩み以ての外にて。剩へ前世の宿
業にやありけん。両眼しひましくて候。又こゝ
に難義なる事の候。八条殿の御娘を迎へ取り給ひ
て候ふが。昔より申す如く。継子継母の御中不和
なる事多く候へば。はや俊徳殿も継母の讒言にて。
天王寺辺に捨て申せとの御事にて。過ぎし頃天王
寺辺へ捨て置き申し候。何ぼう痛はしき御事にて

候。去る間毎日かやうに夜をこめ。天王寺へ参り
痛はり申し候。今日も又参らばやと存じ候。

歌「ながめやる。月は雲井に高安の。く。里をば猶

もこひの松。十返り深き契りとて。別路悲し親の
身の。子を思ふかや鶴が橋。渡りて行けば程もな
く。天王寺にも着きにけり。く。

詞「まづく本堂に参り。俊徳丸の御身の上を祈らば
やと存じ候。

俊徳「みづから清光を見ざれば。時の移るをも弁へず。

衣寒暖に与へざれば。膚は髁骨と衰へたり。

ワキ「如何に申し上げ候。仲光こそ参りて候へ。御悩み
は何と御座候ふぞ。

俊徳「何仲光と申すかあらなつかしや。かく浅ましき有
様を。我だに憂しと思ふ身を。汝なればぞ訪ひも
来て。憐みを垂るゝ嬉しさよ。

地「如何なれば我はかく。父母には捨てられて。苦し

み多き其中に。かやうに人に穢なまれ。それのみならず眼しひて。通塞明闇もわきまへぬ。心ひがめる盲人と。腹悪しく思はるゝ。如何なる罪の報いぞや。三界は広けれど。身を使るべき陰もなし。げにや其かみ蟬丸の。行くも帰るも別れては。知るも知らぬも逢阪の。関とよみにしあはれさも。今身の上に白雪の。消えぬぞ恨みなりける。く。

ワキ「暫く是へ御出であつて。貴賤の参詣に御心を慰め

られ候へ。此方へ御入り候へ。如何に門前の人の渡り候ふか。

狂言「シカく。」

ワキ「御覧候ふ如く病人を伴ひ候。何にても面白き事の候はゞ教へて賜り候へ。

狂言「シカく。」

ワキ「げにく其物狂にて候ふべし。鳥居のあたりに人の群集し候ふよ。さらば其狂女を相待ち面白う狂

はせ候ふべし。

シテ一声

「我頼む。神に心の嘆かまし。身にこそつらき契りなりとも。」

サシ

「さりとは。書き置く跡の水茎の。岡の萱原なびけとの。其言の葉も徒に。末も通らぬ恋慕の道。」

下歌地

「心尽しや中絶えて。音せぬ人ぞ恋しき。」

上歌

「偽りの。言の葉しげき玉章は。く。事を尽さぬ習ひにて。心の奥は知る人も。なしとはいへどう

たかたの。消えぬ憂き身の形見こそ。今は仇なれはなくはと。臥し沈み泣き居たる。く。

ワキ

「如何に是なる狂女。面白う狂うて見せ候へ。」

シテ

「うたてやなさなきだに。絶えぬ思ひの乱髪。結ばれまさる我心。せめては慰め給はずして。狂へとはなど仰せあり候ふぞや。」

ワキ

「いつも形見の文をよみ。面白う狂ふよし聞き及び候ふ程に。今日も又文をよみ。猶々狂乱の謂れを

語り面白う狂ひ候へ。

シテ

「現なや恥かしや。かゝる憂き世の人目もる。山下くゞる水茎の。形見もよしや偽りの。詞の露の玉章の。引き返しても恨みこそ。残る憂き身の置処。

地

「誰に訪はれん道芝の。露雪霜と時雨ゆく。雲の絶間の峰の松。見ずはつれなき。事をもいかで知らまし。

クリ

「さる程に。過ぎにし二月の末かとよ。聖霊会と名

づけ。此宝前にして稚児の舞の有りし時。信俊といひし人の一子。此役を勤む。

シテサシ

「されば此人は。容顔殊更麗しく。

地

「秘曲感応の人なれば。黄鐘調にも叶ふべしと。誠に天人も飛来し。龍神も浮ぶ粧なり。

シテ

「げにや古より。

地

「色には迷ひ安く。又はえならぬ匂ひには。心ときめく習ひかや。折しも松の風落ちて。御簾吹き上

げし隙よりも。互に見えし面影の。是ぞ恋慕の始
めなる。まだ知らぬ。人を見そめて恋衣。ひとへ
に恋ふる心より。海人の藻塩火たきそめて。煙も
空に迷ふらし。わが恋草や茂るらん。難波の浦に
あらねども。藻に埋もるゝ玉柏。顕はれてだに恋
ひばやと。思ふ心はよそにのみ。峰の白雲消えか
へり。絶えず苦しき思ひには。塩焼く浦の煙だに。
思はぬ風に靡くとの。其水茎の形見こそ。今は仇

なれ是なくは。忘るゝひまも有りなんと。よみし
も理りや。猶思ひこそ深けれ。

シテ
「げにや恋路のあはれさは。」

地
「逢はで止みにし憂さを思ひ。あだなる契をかこち
ては。長き終夜ひとり明かし。遠き雲井をながめ
やりて。浅茅が宿に。昔を忍ぶのみ。色好むとは
いふべきと。つらき心の報にや。乱心の苦しやと。
せん方涙に。臥し沈む事ぞ悲しき。」

ロンギ地

「如何にや如何に狂人の。言の葉聞けば不思議やな。
若しも和泉の人やらん。

シテ

「今までは。誰ともいさや白波の。立つ名も憂しと
かこつ身を。如何にと問はせ給ふらん。

地

「今は何をか包むべき。是こそ其名高安の。俊徳丸
にて候ふなり。

シテ

「かくばかり。恋の病ふの身となりて。行方いづく
と知らざりし。人を逢ひ見る嬉しさよ。

地

「共にそれとは思へども。変はる姿や狂人の。こな
たもさすが盲目の。見るかひもなき有様。

シテ

「形見ぞと。く。身に添へ持ちし水茎の。跡も朽
ちせぬ契りとて。二度逢ふも何故ぞ。

地

「逢はぬ間はさりとては。別れの文と思ひしに。尽
きぬ契りの形見こそ。妹背の中の情なれ。く。